

# 茶の湯文化学会会報 No.39

第39号 / 2003年11月9日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 碁石茶とは

柏井 武

碁石茶は、高知県において「幻の碁石茶」として十年ほど前から食物学の研究者により注目され、またテレビなどで健康茶として放映されたことにより、自然食愛好家を中心に脚光を浴びつつあります。碁石茶は、その製法を見ると後発酵茶であり好気性・嫌気性の二段発酵茶として学術的には非常に興味のある茶であることは事実のようです。

茶の製法は、①非発酵茶②発酵茶に分類され、発酵茶は、前発酵茶と後発酵茶に大別されます。非発酵茶は、茶葉を摘み取り直ちに加熱殺青するもので一般的に緑茶と称され、消費者サイドでは、てん茶(抹茶)、玉露、煎茶、番茶とよばれています。前発酵茶は、摘み取り後一定の発酵をおこない加熱殺青したものでウーロン茶、紅茶で代表されます。後発酵茶は、摘み取り後直ちに加熱殺青しますが、その後好気性細菌によるカビ発酵をおこない乾燥させ作るプーアル茶を代表とするものと、加熱殺青し漬け込みによる嫌気性細菌によるカビ発酵をおこない乾燥させ作る阿波番茶を代表とするものがあります。

碁石茶は後発酵茶ですが、特殊なのは加熱殺青後、積み込んでカビ発酵を促し、カビ発酵が完了すれば桶

に漬け込み煮汁を加え蓋をし重しをして、二次発酵をおこなうことです。

このように好気性カビ発酵と嫌気性バクテリア発酵の二段発酵により製造する茶は世界的にも珍しく、現在高知県大豊町で僅か数件が生産しているのみですが、現在の健康茶ブームとテレビのおかげでやや生産が持ち直してきています。私たちも学術的にも珍しく大豊町にしかない碁石茶を暖かく見守っていきたくと思っています。

さて、この碁石茶のルーツはどこなのか、定説はないようですが、中国の雲南省とベトナム、ラオス、ミャンマーの国境付近ではないかとされています。タイは国境こそ接していませんが流域です。山田長政の例もあり日本との交流は相当深いものがあつたのではないのでしょうか。そのような国に渡った人たちが製品、製法を伝え、当時から山茶のあつた大豊町近辺で碁石茶が生産されていったのではないのでしょうか。阿波番茶、愛媛の黒茶もその流れかもしれません。

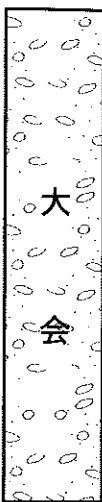
今ひとつ珍しいことに、この碁石茶は数十件で大々的に生産していた時代から現在まで地元では飲まれていません。高知県でも健康茶ブームがくるまで知らな

い人が大部分だったでしょう。このお茶を愛飲していたのは塩飽諸島、坂出、善通寺など香川県の西部地区で、茶粥にしたり茶として飲んでいたようです。なぜ高知県で飲まれずに香川県西部地区で愛飲されたのでしょうか。これは私の推測ですが、水だと思えます。塩田地区の人々、そうして塩飽水軍、或いは伊予水軍、小早川水軍の人たちも水には恵まれていなかったはず。自然腰の強い碁石茶を好んだのではないのでしょうか。今は水道が完備しています。銘水もあります。煎茶に移したのも自然かも知れません。

最後に碁石茶の今後について二つの異なった意見を紹介して終わりとします。

①碁石茶は、後発酵茶で好気性、嫌気性の二段発酵茶として学術的に非常に貴重なもので記録に残しただけでは再現するのは難しいものなので是非生産技術を守り続けてほしい。  
②消費が減れば生産は減退する。これは当然のことだ。

皆様方は、どのようにお考えになりますか。



本年度の大会を、前日の総会に引き続き、

六月一日(日)一〇時三〇分から池坊短期大学こころホールで開催した。午前中に三つの研究発表、午後に三つの研究発表とシンポジウム「人は何故茶を飲み始め、そして飲み続けているのか」があった。その要旨は次の通りである。

#### 本草書に見えるお茶(一)

岩間眞知子

本草史料には唐以前の写本があり、勅撰本草書は前代の本草書をそのまま書写し増補する形式で古態を残すため、陸羽の『茶経』以前の茶を考えるためにも、『茶経』を理解するためにも、また各時代の茶関係資料の把握の『新修本草』までの本草書の中に茶がどのように書かれているかを紹介し検討を加えた。

まず現存最古の本草書は『本草集注』で、この中には茶を示す文字は見られない。しかし上薬の「苦菜」の注に編者陶弘景は「これは茗ではないか」と記している。次に唐代の『本草集注序録』の序録において「好眠」の治療薬として「茶茗」が記されているが、これは従来知られていなかった事実で、これが本草書に最初に登場する茶と考えられる。

唐代の勅撰『新修本草』以後本草書における茶の項目名は「茗」である。なぜ漢代から茶を表した「茶」としなかったのだろうか。本草書の記述から、茶は苦い薬物であるため最初「苦菜」といわれ、「苦菜」は一名「茶」であるので茶と称されるようになる。しかし「茶」は多義のため木偏をつけ「檟」や「楮」でも茶を表したが、当時より広く使われていた「茗」を採用したと推察する。

#### 禅院清規にみる煎点とその展開

木村栄美

現存最古で、後世の清規の原点ともいえる『禅苑清規』では、煎点について次のように決められていた。

①禅院の恒例行事において役職者が高位の僧に対しておこなう、もしくは法系の弟子等が住持や師に対しておこなう茶礼をいう。  
②焼香二回、喫茶二回、薬一回の内容でおこなう。  
③晩間は、喫茶でなく、喫湯である。

④住持・法系の弟子がおこなう場合、あるいは僧堂でおこなう場合は、茶粉末に湯を注ぐ点茶法を用い、他の役職者がおこなう場合は、茶を煮出した煎茶法を用いる。

『校定清規』では、煎点は四節の行事で法系者が行うが、場が僧堂に限られ、焼香一回喫茶一回に簡素化される。場合によっては食が組み込まれるように変化する。『備用清規』では茶礼の行われる場と時がさらに変化する。

日本の禅院においては、煎点は四節などで行われていた。また齋も組み込まれさらに点心が加えられた。様々な清規を総合化して運用していたようである。十五世紀以降室町將軍第でも煎点が行われており、公武の茶礼の展開を考える上で重要な意味を持っている。

#### 「製茶・喫茶屏風」の研究

— (財)小谷城郷土館所蔵 —

森村健一

本屏風は、堺の小谷家に伝えられ、現在小谷城郷土館の所蔵になっている。小谷家伝書によれば、加賀前田家の家臣の娘が小谷家に嫁した折りの持参品であり、江戸時代前期の狩野派に近い画家により描かれたとされている。中国風俗のもと、右隻に茶の栽培、茶摘み、製茶、左隻に製茶から選別、販売(?)、そして喫茶の場面が描かれている。

本屏風には、

①中国に原画があるのか

②制作年代はいつか

③茶樹の形態が現在のものと異なるのはなぜか

④覆下の開始時期、また山形の覆下は従来から存在したのか

⑤煎茶か、抹茶の作法か

⑥朱漆器(天目台の酒器)は中国では見られないが朝鮮王朝又は、琉球とする説があるが中国南部の可能性は

といった問題点が見いだされる。それらの検討を通して、製茶・喫茶の歴史や日中の文化交流の一半が明らかになるのではないか。

#### 小林一三の茶室

松本康隆

近代教寄者の茶道を四つのグループに分類するとき最後の世代に属するとされる小林一三は、「新茶道」提唱者の一人であった。「新茶道」は、大衆の茶道を視野に入れ「簡素則茶道」、「芸術則茶道」を説き、敗戦後の文化国家建設のための人材育成を実現させようとするものであった。一三の茶室十二棟を通じて、「新茶道」実現の試みと近代茶室の建築上の変化を捉えようとすると、自邸内茶室の変遷からは、近代教寄者に共通する個性的

な立札式、由緒ある古材利用、移築、田舎趣味があげられる。自邸外茶室からは、対象客を段階的に広げると共に、茶会という行為においても大衆化を行っていることが伺える。一三による茶室の創意は、彼の事業と共通する「大衆化」というキーワードで括られる。つまり、彼のソフト面の活動と同様、茶室というハード面でも茶道人口増大を目指した変革であったといえる。

#### 「竹川竹斎茶湯記」(仮題) 研究の中間報告

高橋清文

射和文庫(松阪市射和町)には『反故帖』全五十三帖が現存し、そのうちの三帖に「竹川竹斎茶湯記」が貼付されている。竹川家は、伊勢の豪商で両替商などを営み、竹斎の茶会記録編纂の始期は文政十三(一八三〇)年と位置づけられるが、竹斎生誕前、没後の記録も含んでいる。この茶湯記は、懐紙(手紙を伴うものを含む)、竹斎の自他会記録、竹斎が出席しない茶会記録、とされる。その特徴は、記事内容が伊勢地方のみならず、江戸、京都、大坂と広範囲にわたっていることである。竹斎自らが、出席していない茶会記録は、商人達が、各々出席した記録を親族、仲間

閲覧させていたことよって入手されたものと推察される。また、これら茶会の客組記録を検証した結果、茶の湯が幕末、維新时期における両替商の経済交流の手段として積極的に展開されていたことが明らかとなった。

### 茶の湯点前の多様性と変化

—茶碗の仕込み方を例として—

廣田吉宗

茶碗の仕込み方は、(A)茶筌の穂先上向き、茶杓下向き、(B)茶筌の穂先下向き、茶杓上向き、(C)茶筌の穂先下向き、茶杓下向き、の三通りが現行各流派の原則とされている。しかし、(一)特殊な茶碗の扱い方、(二)文献的検討、から興味深いことが考えられる。(一)の場合、各流派内においても平茶碗、筒茶碗、天目茶碗、茶筌置の場合、仕込み方の相違がみられる。(二)において、記述・図ともに穂先が上向きの場合が多い。大正・昭和期でも図には上向きのように描かれている。これらのことから、(A)が一般的であったものが、何らかの理由で例外的な場合に限定され特殊な扱いとして現在に痕跡を残し、また、図は、実態を示すのではなく習慣として記号化されたと推測される。この

自然にその良さがわかって体得されたものではないか。

中村

—どういう形態で一般的に飲用が始まったか。

食べるお茶から飲むお茶へと発展したのか。飲むお茶から食べるお茶に変わったのか。東アジアでは中国文化が圧倒的な力を持ち、中国人の勢力が広がるに連れて、飲茶文化が広まっていった。その影で「茶を食べる」文化があったといえる。つまり飲茶文化圏と食茶文化圏が一時併存していたと考えることができる。それにはお茶そのものを純粋飲料として味わう以前の形態の状況(純粋なドリンク、ポタージュ、スープといった利用法)をより詳しく調べるのが大切。たとえばミャンマーでは茶を漬け物にする。タイでは「ミヤン(茶)の木からお茶を作る。」という。このことから飲む地域、食べる地域を明確に区分して考えることが出来る。茶を何故利用し始めたかについては伝承の世界から見るとは分からない。それによると一効能があるから「神農が毒消しに用いた」という伝承、二お茶を作ると儲かるという意識「茶の商品化」以上二つに大別出来る。今後、中国の地方史含む文献の検

変化の一例として、松平不味は積極的な理由付けと共に(A)を(C)に改変した例があげられる。



シンポジウム「人はなぜお茶をのみはじめ、飲み続けているのか。」

松下 智

喫茶の起源—食べる茶を中心に

中村 陽一郎

茶の民俗史の観点から

高橋 忠彦

中国文化の観点から

富田 勲

茶の効能の観点から

討を行い、茶の分布地域への実施調査をもとに茶の根源を探っていくことが大事ではないか。

高橋

—どう飲まれ続けていたかを煎茶・点茶・泡

茶の流れで追う。茶を扱う用語は葉に対する言葉が使われることが多い。(煎・点)このように茶は薬効を目的として飲まれた。ただ、陸羽の茶経を出発点とする文人の茶は、味より薬効を重視する民間の茶を否定するところから始まった。陸羽の理念は宋代に引き継がれ、真の茶の香り、味を追求するというスタイルに。これが大成するのは明代後期の文人茶。純粋なお茶の追求。ただ、どの時代においても、「茶は薬」という意識は普遍的にある。葉茶にお湯をかけて出す泡茶法が出現し、一六〇〇年あたりから茶壺(ティーポット)を用いてグラスでお茶をいただく、という形が出来てきた。唐宋は戸外で茶を点てて室内に持っていく形。明代は書齋の近くで茶の準備をし、書齋の中で茶をいれる。文人生活の文房具、美術品としての位置づけが茶道具に出てくる。淡泊な味を尊ぶ。強い人工的意図をもって、薬効を重視する民間から完全に離

松下

茶の原産地をたずねて雲南省を重点的に調査。たしかに雲南は茶の木の原産地であるが、それは茶を作って飲んだことを示すわけではない。もともと雲南には伝統的にピンロウ(檳榔)を噛む習慣がある。茶がピンロウと同じ扱いを受けたのではないかとおもえる竹筒山茶もある。雲南での茶の利用は後世でできてきたもの。茶の利用は茶の木が雲南からのぼっていった、洞庭湖の西、武陵山に始まるのではないか。武陵山で山地民族が茶をつくるのを見た漢族が、茶を文化的に始めたのではないか。武陵山から古くあった利用法は、すり茶(茶の芽と共にごまだとか、落花生を入れてすりあわせたもの)ではないか。漢族によるお茶が南下してきて、雲南で茶の生産に着手した。雲南の民族でも経済的理由から、ピンロウから茶へと移行した。ピンロウにはお茶と共通の渋み、苦み、カフェインがある。中国以外地球上で同じような成分を持ったものを噛んだり飲んだりする習慣がある。人間というのは若干興奮する、健康にいい、お腹がいたいのが治るといふふう自然にお茶の効用を身につけてきたのではないか。茶の美学というのは日常生活の中で、経験するうち

れた茶を作り上げていく。ただ、清時代になると発酵茶や花茶などが現れ、明代の文人茶とは反対の方向へと動いた。

富田

—茶をなぜ飲みはじめ続けるかという理由

はカフェイン以外にない。コーヒー、コーラ、ココアといったカフェイン飲料は一〇〇〇年以上飲みつがれている。(ココアは紀元前六〇〇年以上前から飲用されてきたということ)が科学的方法により証明されたのであるが、日本や中国においても、これからは茶の根源をたどることに於いて科学的手法が、必要になってくるのではないか。カフェインには①覚醒作用、興奮作用 ②毒消し・薬(にがみ)としての効用がある。ふつう動物は苦みを毒として認知するが人間・チンパンジーは特別に苦みを求めて病気を治そうとする。苦みは毒にも薬にもなる。自律神経を刺激して、三〇分ぐらいで効いてくるので薬効が分かる。下痢・腹痛に効き、ストレスにも効く。飲み継がれるのはカフェインの依存性によってであり、薬物依存と相通する。カフェイン・カテキンが湯に抽出されなければ、煎茶はなかったといえる。

石黒況翁と半月庵についての一発見(承前)

村上瑛二郎

半月庵は「故小松宮駿河台の御殿に在せし頃」と、この話の発端が駿河台で起きたとも読める記述をしているが、今戸の御殿での出来事だったのが判る。確かに、小松宮の御殿は駿河台にあったようだ。私の所蔵する明治十三年版官員録によると、官の御殿の所在地は駿河台袋町五番地とある。今戸には、その土地柄からいつても別邸があったのだろう。

因みに、この官員録の記録には、「東伏見宮嘉彰親王」とある。宮は、伏見宮邦家親王の第八王子で、幕末には仁和寺門跡として純仁といい出家の身だったが、慶應三年、朝命により還俗し、議定となり、鳥羽伏見の戦いで征討大將軍に任じ、ついで奥羽征討総督、明治三年、東伏見宮家を興し嘉彰と改名した。英国に留学し、佐賀の乱で征討総督、西南戦争にも従軍し、明治十三年には陸軍中將、近衛都督となり、十五年には小松宮彰仁と改名した。その後、陸軍大將、日清戦争の征討大總督、参謀総長、元帥などを歴任した。多分

にお飾り的な要素が強かった感は否めないが、陸軍の重鎮ではあった。

大日本赤十字社や大日本武徳会、大日本農会、水産会などの総裁にもなった。明治三十五年、英国皇帝の戴冠式に天皇の名代として参列したが、翌年一月急病を發し五十八才で死去し、国葬に付せられた。温和で、宗教・救済事業等に理解が深かったと云う。茶の湯に堪能で、裏千家十三世円能斎の号、鉄中の名付け親である事はよく知られている。

東都茶會記では、十五日の猶予を貰い、十四日目の晩に茶室が出来たと、ドラマチックに書いてあるが、実際は、一か月ほど後の(三月某日)が上旬だったから、二ヶ月近い後になる(四月二十七日)に期日を約して招待したのである。突貫工事だったのは間違いないが、果たして本当に十五日間で出来上がったものか。実際の工事日数に拘らず、半月庵という雅で面白い号をつける為には、石黒忠恵が語ったユーモアであり、虚構だった可能性が強いように思う。石黒忠恵が、ユーモアあふれる枯淡な人柄であり、また、周囲に対しよく気のつく人であった事は、高橋箒庵や田中仙樵などの記述を見ると十分察せられる。

忠恵は福島県に生まれ、医学を修め、軍医

室で行われている。半月庵は三疊向切の茶室という箒庵の記述からすれば、半月庵が発展的に帰雲亭になったとは考えにくい。

半月庵という茶室そのものは、何時まで存在したのだろうか。大正大地震にも石黒邸はそれほど大きな被害を受けなかったように、大正茶道記の記述などでは読み取れるが、半月庵はそれ以前に、明治時代に消滅していたのかも知れない。牛込地区内での邸宅の移転などがあつたようにも思われ、その時に取り壊されたかとも考えられる。しかし、宮家の台臨を仰いだ由緒の茶室を、忠恵がむざむざ取り壊すかどうか。あるいは、邸内に保存したまま、普段の茶会には使用しなかったのか?

いずれにしても、記録上は、半月庵は、茶室としては登場せず、忠恵の雅号としてのみ通用していたように思われる。忠恵には、自身の催した茶会を含め、精密な茶会記があつたというから、それを見る事が出来れば一目瞭然なのであるうけれども。

さて、この石黒家にとっては、かなり重要と思われる一軸が、何故、何時ごろ、何処へ流出し、誰の手から手に渡って、書かれてから百十八年後に、東京ならぬ京都に姿を現し

たのだろう。石黒家の御子孫に話を伺えば、あるいは何かのヒントが得られるかも知れないが、今のところ、私のようなアマチュアには、それは荷が重いようである。

例会のご案内

東海例会

第八回の例会を次の通り開催します。ふるってご参加ください。会場はいつものように名古屋女子文化短期大学アセンブリ・ホールです。会員は会費が無料ですが、会員以外の方の参加には会費一〇〇〇円が必要です。

〇一月二八日(金)午後六時  
「茶どころ探訪」取材余話 長谷義隆氏  
茶と菓子と 赤井達郎氏

東京例会

次の日程で開催します。前号でお知らせした行事日程のものは少し内容が異なっていますので、ご注意ください。会場は東京芸術大学です。

〇一月二二日(土)午後二時  
茶会記に見る名物裂 吉岡明美氏

と成り、明治二十三年には陸軍軍医総監となつて、日露戦争中にもその職を勤め、乃木希典と親交があつたことでも知られる。男爵から子爵に進み、貴族院議員、枢密顧問官、日本赤十字社社長などを勤めた。早くから茶の湯に親しみ、十六羅漢会の中心メンバーとして、多くの茶人と交流し、遠州流の小堀家の復興にも力を尽くした。昭和十六年、九十六の長寿で没した。

牛込薬店袋町二十六番地に石黒の邸宅はあつたと前掲官員録にはある。東都茶會記の記事には、牛込湯場町に本宅があるとあり、早稲田多開山にも別邸があつたと云う。いずれにしろ、明治から大正にかけて牛込に石黒邸があつたことは確かだ、半月庵もその中に建てられたことは間違いあるまい。

しかし、東都茶會記・大正茶道記・昭和茶道記に記述される石黒忠恵の茶会は、最初の大正二年四月の乃木大將追憶茶会から、三年十一月の古稀茶会、六年五月の炉名残茶会、七年六月の五月雨茶会、八年五月の初風炉茶会、十一年四月の花季茶会、十四年十一月の口切り茶会、昭和二年十月の益田鈍翁中杖拝受祝賀茶会まで、八回を数えるが、その全てが本宅内の帰雲亭と名付けられた四畳半の茶

和物茶碗成立試論 宗易形への道程

竹内順一氏

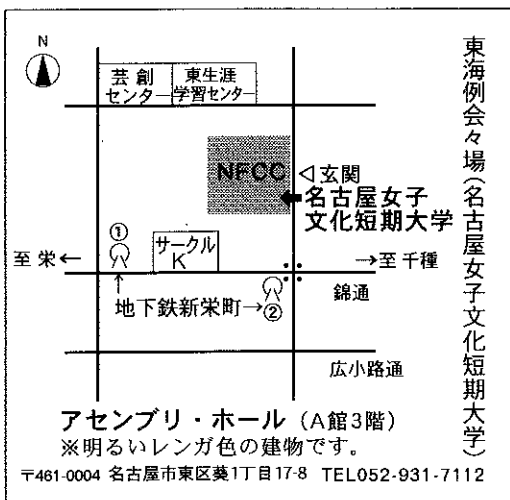
〇二月二八日(土)午後二時  
古筆切断と茶掛け

名児耶明氏

高知例会(再掲)

次の日程で開催します。会場は丁R土佐荘です。発表の後簡単な茶事を行いますので、参加を希望される方は、あらかじめ学会事務局までご連絡ください。

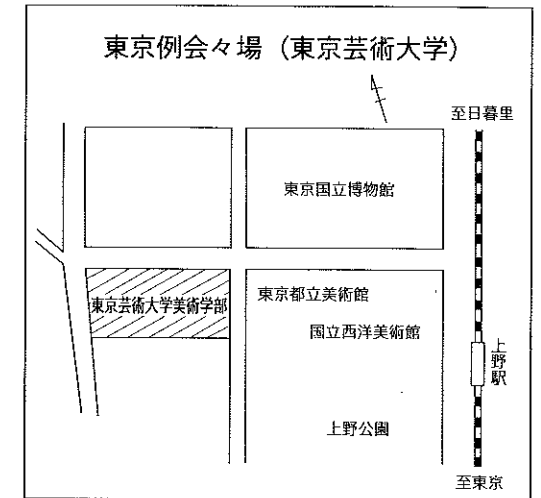
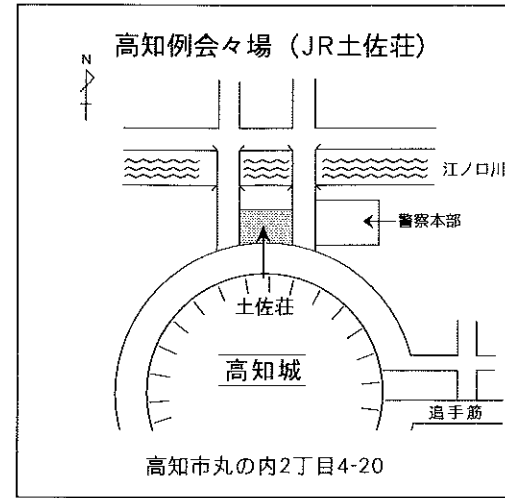
〇二月一四日(日)午後四時  
茶事と茶会 柏井 武氏



東海例会々場(名古屋女子文化短期大学)

アセンブリ・ホール (A館3階)  
※明るいレンガ色の建物です。

〒461-0004 名古屋市中区東区薬1丁目17-8 TEL052-931-7112



後記

\*先号の平成一五年度行事予定のうち、七月二六日の東京例会の発表題が間違っていました。「『利休百回記』の文献学的研究の射程」は「『利休百回記』の文献学的研究の射程」でした。お詫びして訂正します。また、六月二〇日の東海例会の発表題を追加し発表者名を訂正します。筒井絃一氏の題は「玄々斎と又日庵」でした。高取友仙屈氏を高取芳樹氏に訂正し、「煎茶道と仙人」という題を追加します。発表者の方々、また会員の皆様にご迷惑をおかけしました。

\*今号は大会発表の特集といった形になってしまいました。例会の発表要旨もたまっているのですが、次号に廻さざるをえません。お許しください。

\*投稿の原稿がまだ一本残っていますが、これは次号に掲載します。そうすると、次号はかなり誌面に余裕が生まれると思われれます。投稿をお待ちしています。

\*ニューヨークのメトロポリタン美術館では、今織部の展覧会が開かれているということです。織部焼きにアメリカの人々がどう反応するのか、ちよつと見てみたい気が

します。もしこの展覧会をご覧になった方がおられましたら、感想などをお送りいただければ有り難く思います。